

かも 市史だより



◆編集発行 加茂市幸町二丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

かや もり よし 洋画家・栢森義の「雪女」シリーズ



上：《織女の家路》昭和41年（1966）
（新潟県立近代美術館・万代島美術館所蔵）
左：《雪女の訣別》昭和43年（1968）
（加茂南小学校所蔵）

洋画家・栢森義（一九〇一〜一九二）は加茂町新町の出身です。母スミは村松町（五泉市）に奉公に出、歩兵第三十連隊所属の軍人との間に婚外子として生まれたのが義（本名政義）でした。

栢森は昭和四十年代以降、「雪女」シリーズに取り組みます。加茂では明治二十年代に近代的な織物業が勃興し、加茂川右岸（新町の対岸）を中心に、北辰舎や皆川商店などの特徴的な「鋸屋根」の織物工場が立ち並びました。栢森少年はそこに働く女工たちに好奇の眼差しを向け、彼女らと筆筒職人たちの恋愛にも興味を抱きました。彼が後年描いた「雪女」は、「昔からある物語とはまったく無縁」で、少年期に見た女工たちや母親など「私の生い立ちにまつわるいろいろな女」「豪雪の越後の女」への思いが重なって生まれたものでした（「ふるさとを描く」『新潟日報』昭和52・2・22）。

シリーズの起点となる《織女の家路》には、鋸屋根の工場を背景に、一日の仕事を終えて家路を急ぐ女工たちの列が描かれています。その後、画家の空想は自由度を増し、花束を持ち空中を浮遊する《雪女の訣別》など、雪女のイメージは様々に変転していきました。

栢森が晩年に行き着いた「雪女」シリーズには、自身の生い立ちや思春期の異性に対する感情、往時の加茂町への郷愁などが複雑に織り込まれているのです。

（新潟県立近代美術館 長嶋圭哉）

森田千庵家とその分家

千庵は加茂市の医師で、父甫三（一七六七～一八二八）の次男として寛政十年（一七九八）に生まれました。十四歳のときに江戸の岡寿庵に学び、さらに二十四歳、京都の藤林普山に入門します。塾ではオランダ医学を主として学びました。京都から帰った翌年再度江戸に出て、宇田川玄真や戸塚静海・藤井芳亭とも交際しオランダ語の習得に励みま

した。千庵は二十九歳のとき、水原村

（阿賀野市）の沢野唯八の娘くんと結婚します。二年後の文政十一年（一八二八）に父の甫三が没しました。その後も家伝薬の一粒丸を改良して、江戸にも販売しています。安政六年（一八五七）、千庵は六十歳で没しました。

千庵には長兄の正太郎がいます。早くに加茂町庄屋の市川正兵衛へ養子に入っていました。甫三の三男円治は文化七年（一八一〇）生まれ、天保十四年（一八四三）に栃尾町

女 浦名郡大塚村代々屋後瀧川三郎助妻

善盛 平立三男名 國治文化七年八月十二日夜五時生 天保十四年九月古志郡枳尾町任 醫師 業勤事十四年安政四年月鴻色引移 只

未年西置場村田邊新左門 酒造藏に越す 妻長鴻色 滝澤氏之三女名三輪トモ

明治三年枳尾町 轉任明治五年七月百病死常事奉 平立四男名 正治文化十年正月七日先考年時

魚沼郡小千谷販元大割元役東徳右門養子 三四年店ヲ離別 東都ニ出テ西洋家ヲ極青海

塾入又川本幸氏之門ニ入ル 屏名ヒテ 弘化

二年所羽郡 柏崎 港ニ住シ 匠業イテ 文久二 成年三月廿八日七時病死 年五十七歳 男三子

▲ 森田家系図 甫三の三男円治(善盛)と四男正治(孚盛)の記事 (長岡市立科学博物館寄託文書)

（長岡市）に分家しやはり医業を勤めました。その後西置場村（新潟市南区）に引越しましたが、明治三年（一八七〇）に再び栃尾町に移り医業に従事後、明治十一年（一八七八）に病死しました。



▲ 山吉家の遺構 威の妻面に残る山吉の家紋が残る (上町 永井茶舗)

四男の正治は文化十年（一八一三）生まれで、若年のとき、小千谷町周辺の十数村の庄屋を統轄する割元東徳右衛門の養子に入ります。しかし三、四年後離別し、江戸に出て、戸塚静海や川本幸民で西洋医学を学びます。その後、柏崎町で医業を開いて活躍し、文久二年（一八六二）に享年五十歳で病没しました。

千庵の実子は夭折し、文政五年（一八二二）に生まれた兄正太郎の三男を養子に迎え、名を専庵と名乗らせ森田家を継がせました。また専庵の代に、姓を森田から先祖の山吉に復し、山吉専庵は白山新田（三条市）の渡辺精左衛門の娘だけを娶り、

▲ 制作中の山吉頼奇 (民俗資料館所蔵「山吉頼奇遺作展写真集」より)



嘉永三年（一八五〇）に息子の省吾が生まれました。医学は義父千庵から、のちに新潟町（新潟市中央区）の竹山屯から学び、また京都に出て修業し、帰郷して開業しました。しかし、家業は不振となり、廃業しました。

省吾の長男の森太郎は明治十年（一八七七）生まれで家督を継ぎました。

明治十三年（一八八〇）生まれの森次郎（山吉頼奇）は、分家に出て絵の道に進みました。明治四十五年（一八七二）に東京に転居し、文部省美術展覧会作家田中頼璋の画塾に入り日本画を学びました。画塾では一時、塾頭の役目を負うほどでした。加茂町へ帰って来たのは、大正八年（一九一九）とされ、以後郷里で制作活動を行い、昭和三十一年（一九五六）に没しました（加茂市民俗資料館所蔵「山吉頼奇遺作展写真集」）。

（加茂市史編集委員 関 正平）

雛田千尋―女子教育を拓く

新潟県は女子の中等教育機関の設立が遅れていました。そのなかで、加茂町に生まれて最初期の教育を受け、さらに教育者として歩んだ雛田千尋（一八六九～一九〇八）の軌跡を辿ります。

雛田松溪と千尋の幼年時代

青海神社社僧で国学者の雛田松溪（一八一九～一八八六）は明治維新时期後に私塾を開き、子の千佳良（一八四七～一九〇二）も漢学と英語を教えていました（『新潟県学事第十五号報』）。松溪の孫で千佳良の子・千尋と弟作楽（一八七三～一九〇七）は塾生の学ぶ姿にも触れながら、いつでも蔵書が読める環境にあり、学習を好みました。



▲日本女子大学校櫻楓会の役員 前列右から2番目の女性の肩に手をかけて立つのが雛田千尋（『日本女子大学校四十年史』より）

ところが明治十一年（一八七八）に祖父が中風に罹り、十九年に松溪、二十二年に祖母キク（一八二八～一八八九）が亡くなるまで約十年にわたり、千尋の十代は看護に費やされました（『成瀬先生講演集』第六）。

生徒から教師へ

明治二十年五月、牧師の成瀬仁蔵（一八五八～一九一九）ら八人が発起人となって設立した四年制の私立新潟女学校が開校し、千尋も十九歳で入学しました。三年時には学年卒業式で生徒代表となっています（『新潟新聞』明治23・7・13）。しかし卒業を前に中退し、ここでも一期生として東京の女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）に入学しました。すでに作楽が東京英語学校に通学していたことと（浅見恵『小柳司氣太・日記』）、何より千佳良が漢学の実力を活かす希望があつて、家族揃つての東京寄寓だつたと思われれます。

明治二十八年に地理・歴史を修めて卒業し、千尋は市立大阪高等女学校（現大阪府立大手前高校）教師になりました（『読売新聞』大正3・9・

26）。新潟女学校の恩師で、米国で女子教育を学んでいた成瀬仁蔵が前年に帰国し、私立梅花女学校校長として大阪に赴任していました。成瀬の勧誘と米国の新しい女子教育への関心から、大阪へ就職したと推察されます。

七六通の書簡「師の君へ」

千尋宛の大阪高女生や同僚からの書簡七六通をみると、千尋は「師の君」と慕われています（田上町遠藤勇氏所蔵）。その中の約七〇通が明治三十五年四月から五月に書かれたもので、五月十六日には病気で亡くなる父千佳良の看病のため加茂町に帰っていた時期のもので、見舞いとお悔やみの言葉に添えて、「一日も早く御帰阪遊ばされむ事を」皆他の人々が雛田先生これで御帰坂遊されんのであろうかと申し」などと、こぞつて辞職を危惧し、引き留めるかのような内容です。

組織的にこのような手紙をなぜ書いたのでしょうか。背景に、明治三十四年四月に成瀬らが中心となつて日本女子大学校（現日本女子大学）・同附属高等女学校を東京に設立したことがあります。千尋はこの附属高等女学校に強く誘われていたのです。

結局は一步前に踏み出して、千尋は附属高女教師になりました。明治



▲ノブ・千尋・作楽の招魂碑 作楽の子二葉子・録子の建立

三十六年四月からは日本女子大学校櫻楓会（同窓会）役員や責善寮（寄宿舎）の初代寮監にも選任されて、同僚・生徒の信望を得ていきました（『日本女子大学校四十年史』）。

明治四十一年九月二十二日、千尋は享年四十歳で、療養先の加茂町で死去しました。同月三十日、女子大学校は追悼会を催し、成瀬は二十年來生徒としても教育者としても、女子教育を拓いてきた千尋の生涯を称えました。

明治四十二年四月に、松溪の漢詩集『我が我堂遺稿』が上梓され、幕末維新期の重要な文献となつていきます。この上梓は、千尋が亡くなる直前に病を押して従兄弟の漢学者・小柳司氣太（一八七〇～一九四〇）に遺稿を託し、実現したものです。また、尾振山の雛田家墓地には母ノブ（一八五四～一八九三）・千尋・作楽連名の招魂碑が、松溪や千佳良の墓碑の脇に建っています。

（新潟女性史クラブ 加藤久美子）

庶民宰相・田中角栄と加茂市

初の新潟県出身の首相で、「今太閤」、「庶民宰相」と呼ばれた田中角栄は一六回の選挙を全て加茂市を含んだ旧新潟三区から選出されていた。その田中角栄と加茂市との関わりを振り返ってみます。

令和六年の年初、かつて「目白御殿」と呼ばれた旧田中角栄邸が焼失、というニュースが飛び込んできました。

ここは大物政治家や地元自治体だけでなく、全国から陳情団が「目白詣」として訪れ、就職の世話をはじめ省庁への仲介等、正に田中角栄的な戦後日本政治の現場を象徴する場でした。

田中角栄は戦後日本政治の象徴的人物として、人々の記憶だけでなく、

▲越山会の会報誌 越山会は選挙時だけでなく、会員向けに国会見学バスツアーや地域対抗野球大会等も行って来た。写真内の会食場は「目白詣」で待合室として利用されたとされる場所であり、田中が在宅の際には全国から多くの陳情等の来客で賑わったという（『月刊越山』181）

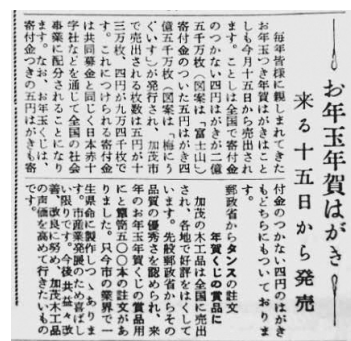


その痕跡は未だに日本列島の様々なところに刻まれています。

加茂市は田中角栄が計一六回の当選を重ねた中選挙区時代、旧新潟三区の一部であったことを記憶している市民も少なくないでしょう。ここでは改めて加茂市と田中角栄との関係をまとめてみることにします。

まず、加茂市は日本政界史上において最強の後援会で、鉄の結束を誇ると言われた「越山会」の公式な発足地とされています。その日は昭和二十八年六月二十八日とされ、

材木商であった菊田次郎が加茂の越山会の会長につきましました。この当時は既に田中は四回の当選を重ねており、旧新潟三区の各地に後援会組織を有していましたが、田中の徴兵による軍隊時代の上官であった片岡甚松が当時、故郷の加茂に居たということも、田中が直々に名付けたはじめての「越山会」という名を利用した後援会にしたことに関わっているかもしれません。片岡甚松はその後、越後交通社



▲桐箆筍が特賞商品に採用された紹介記事 昭和33年、34年に年賀はがきの特賞として桐箆筍が採用された（『加茂市政だより』昭和32.11.1）

社長・越山会県本部会長として社業だけでなく、地元での選挙を取り仕切ることとなります。

その後の田中と加茂市との関わりは、戦後最年少の三十九歳で郵政大臣として初入閣を果たした際にまず一つ垣間見ることが出来ます。就任翌年のお年玉付き年賀はがきの特賞商品に加茂の伝統工芸品である加茂総桐箆筍が採用されたのです。このことがきっかけで加茂が桐箆筍の産地として広く全国に知れ渡ることになりました。

さらに、桐箆筍に関しては、田中角栄の大蔵大臣の在任期間の終了した翌年の昭和四十一年の「物品税法の一部を改正する法律」において、それまで桐箆筍は贅沢品とされ、二十%の物品税がかけていられたが、免除されることになりました。田中が最も得意とした土木事業関係については、昭和四十四年の加茂川・下条川の大水害をきっかけにし

た河川改修事業の実施に関わりがありました。それは、水害当時の吉田巖市長の時代や次の皆川良二市長の時代に、市政の重要人物らとともに「目白詣」に行くことが増えた、ということが、当時の加茂市の政界関係者の証言からも示されています。また、加茂川沿いの石川公園に加茂川河川改修の記念碑が建てられていますが、その片面は田中角栄による書が刻字されています。

加茂市は新潟三区の中でも木工、繊維、機械をはじめ、多様な産業を有していたことから、土木産業が必ずしも地域の主要産業とはならず、その面からは田中角栄との関わりが比較的薄かったとされますが、その痕跡は確かに刻まれています。

（近現代部会 箕輪允智）

▲上…石川公園の加茂川河川改修の記念碑
下…加茂市役所内の原本

石川公園の加茂川河川改修の記念碑に刻まれた田中角栄の書。この裏には河川改修に尽力した吉田巖・皆川良二両市長の名で大規模改修の完了を讃える内容が刻まれている

